イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第25回)

オークの木

神奈川芸術劇場で『オーランドー』の翻訳上演が始まった。この芝居は、もともと20世紀初頭のモダニズム作家ヴァージニア・ウルフが書いた伝記小説を舞台化したものだ。「意識の流れ」の手法など、新しい小説技法で知られるウルフには、もう一つ、先駆的なフェミニストとしての顔がある。「年に500ポンドの収入と自分だけの部屋さえあれば」女性も芸術・学問の分野で一人前に活躍できるのに、という主張は、当時としては画期的だった。

さらに、当時画期的だったのが、そのウルフの書いた伝記小説『オーランドー』である。ただの伝記ではない。主人公オーランドーは、16世紀の末にエリザベス女王から寵愛され屋敷を賜った青年貴族として登場する。そのままロシア王妃と恋に落ちたり、トルコ大使として派遣されたりしているうちに、時代が18世紀に変わる頃、彼はある朝目覚めて自分が女性になっていることに気づく。そして、19世紀のヴィクトリア朝時代の生活を経て、20世紀初頭の現在、彼、いや、彼女は36歳、という仰天の展開である。

女性の立場の変遷を時代背景と共に辿っていく筋を見れば、フェミニストとしての主義主張が感じられるだろうが、この「伝記」の背景はそれだけではない。満ち足りた結婚生活を送っていたウルフには夫とは別に、心から愛する同性の愛人が

いた。やはり詩人として賞を取るなど活躍したヴィクトリア（ヴィタ）・サックヴィル＝ウェストである。オーランドーのモデルは彼女であり、実際、小説出版の際、ヴィタの写真が何枚か扉に掲載されている。舞台となる「屋敷」のモデルはケント州にあるサックヴィル家の地所「ノールハウス」と見て間違いない。

この屋敷がサックヴィル家のものになったのは、16世紀、エリザベス女王の従兄にあたるトマス・サックヴィルが女王から賜ったのが始まりである。彼は法律家で、政治家で、また文筆家でもあった。シェイクスピアより少し早い時代に、英語で初めて書かれた本格悲劇『ゴードック』の共同執筆者としても知られている。オーランドーは彼からヴィタまでのサックヴィル家年代記を一人で体現しているとも言える。

物語の中で、オーランドーはずっと「櫿の木」という詩を書き続けている。原語では「oak」。ブナ科コナラ属の落葉樹で、常緑樹の「櫿」とは違う。だが、「オーク」は明治時代に最初に「櫿」と訳されて以来、慣例で「櫿」と訳されてきたそう。かつてビートルズが「ノールハウス」で撮影した「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」のPVにも櫿の木、いや、オークが4人に囲まれて写っている。